

道元禪師と瑩山禪師

東 隆 眞

仏教は、およそ二千五百年前、インドの釈尊の坐禅成道にはじまります。その後、原始仏教、部派仏教の時代を経て、中央アジア、中国大陸、朝鮮半島から日本、またチベット、モンゴル、ロシアに伝わった北伝仏教、また大乘仏教（チベット仏教〈密教〉を含む）と、スリランカ、ミャンマー（ビルマ）、タイ、カンボジア、インドネシア、マレーシアなど東南アジア上座部、南伝仏教に分かれて伝わりました。今や、ヨーロッパ、アメリカなどアジア以外の国々に向けて北伝の大乘仏教、南伝の上座部仏教はどんどん広がっています。

故前角博雄老師の仏教は、北伝大乘仏教の系統に属する日本の曹洞宗（禪宗）であります。

日本の曹洞宗は坐禅成道する釈尊を教主・本尊とし、高祖道元禪師、太祖瑩山禪師を両祖とし、その一仏両祖を尊崇します。

仏教は釈尊の坐禅成道をその歴史的、宗教的原点とするのですから、曹洞宗が釈尊を教主、本尊とするのは当然のことであります。

釈尊の仏教の本質を明らかにし、正しい仏教の伝統を確かめたのが、道元禪師であり、道元禪師の立場を正しく継承し、広く発展させたのが瑩山禪師であります。

そこで道元禪師と鑿山禪師について簡単におはなしいたします。

道元禪師は、今からおよそ八〇〇年まえ、鎌倉時代、日本の京都に生まれました。日本に百濟から仏教が伝えられたのは五三八年（一説には五五二年）のこととされています。やがて奈良時代になると、中国大陸や朝鮮半島から仏教をはじめとする新しい外国文化がもたらされました。奈良時代の仏教は、華嚴宗、律宗、法相宗、成実宗、俱舎宗、三論宗など、經・律・論の六宗です。

次の平安時代の仏教は、最澄と空海が中国へ留学して学んできた天台、真言の二宗でした。

奈良時代、平安時代の仏教は、学問中心の仏教であり、貴族的な仏教であり、国家鎮護の仏教であり、靈驗利益の仏教でありました。

道元禪師は日本の仏教がもたらされてほぼ六百年後の京都に生まれ、直接には、母の死

によって無常を感じ、母の遺言にもとづいて天台宗の比叡山で出家したのでした。

道元禪師の関心は、いったいほんとうの仏教とは何か、ほんとうの仏教はどのようなように伝えられているのかということでした。道元禪師の生涯は、この二つの点について前代への疑問と懐疑を提起し、そしてこの二つの点を解明することについてやされたと言つてよいと思います。道元禪師の宗教的人格がきわめて慈悲の精神に富んだものであることは言うまでもありませんが、それに加えて、道元禪師は、まれに見る求道心が強く、きわめて理論的で哲学的な性向をそなえているといえましょう。

さて、そこで、道元禪師の説く仏教の特色について、二、三の点をあげてみましょう。

第一に道元禪師は、正しい仏教の教主は釈尊であることをつねに強調します。「娑婆世界の教主、釈迦牟尼如来大和尚」としてしています。



「釈迦一仏を見たてまつるべし」と『永平清規』にあります。北伝の大乗仏教である日本仏教では、釈迦牟尼仏のほか、薬師如来、阿弥陀如来、大日如来の諸仏、観世音菩薩、文殊菩薩、弥勒菩薩、地藏菩薩、不動明王など、諸菩薩、明王などを教主、本尊とし、ないしは尊崇するので、道元禪師は、これら諸仏、諸菩薩を否定するものではありませんが、正しい教主は釈迦牟尼仏であることを強調します。

道元禪師の説く教主、釈尊は、超越的、絶対的、唯一神的な性格の存在ではなく、かりに歴史上の人間釈迦とするにしても、苦しみ悩む人間性をむき出しにした釈尊ではもちろんないのです。慈悲深い父であり、偉大なる師であり、理想となる釈尊であります。私たちの信仰生活を通して、その生活のなかにあらわれてくる釈尊であります。

第二に、仏教の本質は坐禅であることを主張

しました。このことは『正法眼蔵』の『辨道話』に明らかであります。道元禪師以前の奈良仏教、平安仏教も、また鎌倉時代の道元禪師の周辺においても、仏教にさまざまな宗派、学派に分かれてしまい、仏教の正しいすじみちがはっきりしなくなりつつあったのです。このときにあって道元禪師は『正法眼蔵』『仏道』の巻に書いて正しい仏教の一つのみちを求めて、宗派仏教をしりぞけ、坐禅こそ仏教であり、仏教の坐禅であることを説いて、また宗名をしりぞけたのです。道元禪師は、仏教はいわゆる小乗とか大乘とかの枠組みにとらわれることなく、このような枠を超えて理解しなければならぬと考えました。また、坐禅といっても、いわゆる禪宗という宗派の説く坐禅ではなく、菩提樹下の金剛座の上で坐禅して成道した釈尊の本質に直結する坐禅でなければならぬと考えました。このような坐禅を自受用三昧といいます。そのす

がたは結跏趺坐であります。からだの結跏趺坐もあり、こころの結跏趺坐もあります。その作用は身心脱落であります。これを要するに只管打坐とよびました。只管打坐は、1、坐禅の一行にうちこむ、2、ひたすら坐禅する、3、ただ坐禅する、4、坐禅の精神で日常生活を行う。坐禅を超えた坐禅。この四つの意義をそなえています。

第三に、道元禅師は、正しい仏教の伝統を確立しました。『正法眼蔵』『仏祖』『行持』の巻に明らかであります。過去七仏の釈尊、第一祖摩訶迦葉尊者から菩提達磨尊者を経て、大鑑慧能禅師・洞山良价禅師・雲居道膺禅師・天童如淨禅師から永平道元大和尚に至る系譜と、代表的な祖師たちの言行を説いたのであります。歴史的な形式を借りて仏教の生命が純一に継承されてきていることを体験のうえからも確認したのであります。

道元禅師の特色として挙げなければならないことは、まだいろいろありますが、とりあえず、ここでやめておきましょう。

道元禅師の四代目が瑩山禅師であります。瑩山禅師は、道元禅師滅後およそ一五年、越前に生まれました。瑩山禅師は、道元禅師の滅後の弟子たちの周辺が一時的に混乱しまして、これを「永平寺三代相論」とよんでいます。この相論を目のあたりにして、これを歴史的教訓とうけとめ、道元禅師のおしえを再確認し、さらにそれを実践的に継承して、多くの檀信徒を獲得していったのであります。いまは、この点に限ってご紹介いたします。とくに、さきにあげた道元禅師の三点に重ねあわせて触れておきたいとおもいます。

第一の点ですが、道元禅師の教えにしたがって瑩山禅師も釈尊を教主として位置づけるのは同一であります。あえて違いを言うとするれば、

道元禪師は積尊一仏を強調したのでありますが、瑩山禪師は地方の守護神である白山に親近感を抱き、祖母、母親、自分と三代にわたる觀世音菩薩信仰の影が濃厚となっているのがみとめられるのであります。瑩山禪師以後の曹洞宗寺院が積尊以外の諸仏諸菩薩などを必ずしもこぼまなくなるのは瑩山禪師以降で、すなわち瑩山禪師の弟子、その弟子あたりであります。そのことについて瑩山禪師は積極的に指導したというのではありませんが、瑩山禪師の宗教的環境および従来の神仏信仰に対する包容性が間接的に影響を与えているのではないのでしょうか。

第二の点ですが、道元禪師の坐禪の教えを学び、これを分りやすくして門下に教えているのであります。瑩山禪師は、坐禪の教えをすぐれた宗教的素地をそなえているだけでなく、必ずしもすぐれた宗教的素地をもたない人にも坐禪を広める努力をしました。『三根坐禪説』は、上

根はもちろんのこと、中根、下根の人びとも、すべての人がひとしく坐禪の悟りにあずかることを説いています。また『坐禪用心記』では、坐禪中に心が散乱するときは、出入の息を数えてみるとよい、なお止まないときは公案を考え、坐禪中に心と説いて、道元禪師の只管打坐を補強する手段として、数息觀や公案の功夫を説いているのです。道元禪師は教える立場に立って説いています。瑩山禪師は、どちらかといえば学ぶ立場に立って説いているといえるでしょう。

このことが、日本の曹洞宗の民衆化、一般化する重要なポイントの一つであろうと思われれます。もう一つ、ここで指摘しておきたいのは、道元禪師の坐禪は、自受用三昧とか、身心脱落とか、只管打坐とか、そういうことばによつてあらわされています。これらのことばは、いわば坐禪中心の表現です。これに対して瑩山禪師の立場は、「平常心是道」という瑩山禪師が悟りを

開いたときのことばによって特徴づけられるとおもいます。平常心是道は、中国唐代の僧である南泉と趙州の問答に発し、以後よくもちいられてきた禅のことばです。これを瑩山禅師はみずからの宗教体験とすることによって、その禅風を確立しました。平常心是道とは、日常生活をまごころで生きていくことを言います。まごころで生きていくとき、誰でも、いつでも、どこでも、平常心となるのであります。このように必ずしも坐禅のかたちにとらわれない坐禅をこえた禅、日常生活のなかに平易に実践していくことが出来る坐禅のおしえは、瑩山禅師の特色といつてよいでしょう。

第三の点ですが、道元禅師は、正しい仏教を求め、その正しい伝統を明らかにしました。しかし、釈尊からはじまって歴代の祖師たちの生涯とか、悟りの内容とか、悟りがどのような師から弟子へ伝えられた、とか、その詳細につい

て、この点をおぎなつてまとめられたのが、瑩山禅師の『伝光録』です。瑩山禅師は、釈尊から自分のまえまでの五十数代にわたつて、ひとすじの光がどのようなに伝えられたかを一代も洩らすことなく完全に調べて明らかにし、これを門下に伝えたのでした。仏教を学ぶ者にとって、仏教の伝統と權威はこの上もない誇りと自信と安心を与えます。

なお、瑩山禅師は、道元禅師よりも多くの寺院を建て、多くの弟子を育てました。とくに、瑩山禅師は、道元禅師の男女平等思想をうけついで、女性の弟子を自分の後継者とし、女性を寺院の住職としました。そのほかにもいちいちお伝えしたいこともありますが、別の機会にゆづります。